

伯耆大山～槍尾根～

【報告者】A・K

【日時】2016年2月27-28日 【天候】晴れ

【参加者】I 冨・A・K・I 橋・S 上・ダニー・I 藤・K 崎

《コースタイム》

2月27日：8：00 奥大山スキー場駐車場 ⇒10：10 文殊越 ⇒11：10 鳥越峠 ⇒テント設営&雪訓 ⇒14：30 行動終了

2月28日：5：00 起床&7：00 テント出発 ⇒8：06 キリン峠 ⇒9：50 1580 台地 ⇒10：40 ジャンダルム ⇒11：00 撤退決定 ⇒12：20 テン場到着 ⇒14：20 駐車場

《 報 告 》

【2月27日】

6：00 出発予定のところ、前日の到着が遅れたこともあり、実際には8：00 過ぎに奥大山スキー場出発。この時期はスキー場横でゲートが閉じており、大山槍尾根への取り付き（ここにも駐車場がある）までは40分程度のボッカとなる。ここでビーコンの作動確認20分。取り付きは9：00 過ぎとなった。左に尾根を眺めながら雪道をボッカし、10：10 文殊越との分岐に到着。しかしこのときは到着に気づかず、少し直進してから右に折れて鳥越峠^{とりごせ}へ向かう。11：10、鳥越峠の尾根に到着し、よいテン場を探すが見当たらず、強風も手伝って、少し下ったところにテントを設営することとした（11：30 テン場着）。

当初予定ではテントを設営したのちに槍尾根へ取り付く予定であったが、斜面のテント設営それ自体に時間・労力を取られ（整地・テント2張設営・トイレ作成に2.5時間ほど）、一通りの雪訓ののち、本日の行動を14：30で打ち切り、大変長い宴に突入することとなった。一通り飲んで食べてもまだ夕方で、ここからの鍋。体重は出発前より確実に増加。

【2月28日】

5：00 起床、7：00 出発。尾根の少し左の斜面をキリン峠に向かって登りあがる（後掲GPSルート表示参照。多くのメンバーは鳥越峠経由でキリン峠へ向かっているつもりであったように思う）。8：06 キリン峠到着、槍ヶ峰へと向かう。ところどころ小規模な雪庇が張り出している個所や、雪解けによるミックス帯が現れて、難儀する個所もある。9：00 頃、危険地帯辺りからはコンティニューアスで進む。

全体に雪が少なく、足首～すね程度のラッセル(?)。多くの場所ではコンティニュー

アスまでの必要はないが、万が一のことを考え、そのまま進む。キリン峠の乗越しを超えた 1580m 辺りの平坦な個所に着いたのが 9 : 50 頃、最大の難関であるジャンダルムに到着したのが 10 : 40 頃。ここまでで 3 時間 40 分なので、振り返れば、やはり全体にペースが遅いように思われる。

ジャンダルムでは尾根上を移動するのに危険を感じ、途中でプロテクションを取る方法や代替ルートを検討したが、明快な答えが出ない。後に振り返ると、このジャンダルムでは頂点右辺の切れ目から、ザイルで確保したうえでクライム・ダウンして、その先行者が尾根までトラバースしたところで後続の確保を行うのが良いように思われた。当時は事前の調査不足で、はたしてこの切り立ったジャンダルムを降りて良いものかどうか、降りたとして撤退をどうするのか、加えてその先のルート・難易度が不明であった。加えて、撤退時刻を 12 : 30 としており、仮にジャンダルムを通過しても槍ヶ峰基部のトラバースで時間切れとなることが具体的に予測できたため、これ以上のリスクを冒さず、11 時にジャンダルムで記念撮影をして撤退を決めた。一路引き返し、テン場到着 12 : 20。テント撤収、駐車場到着が 14 : 20。



【検 討】

(1) 行程面 反省点としては、装備の絞り込み不足、事前の調査不足、位置把握能力の不足、および全体的な体力不足が挙げられる。初日については重荷を背負ってのラッセルが思うように進まず、鳥越峠付近までしか進めていない。全体的に体力面を強化することは当然であるとしても、テントを上部まで持って上がるのではなく、文殊越付近に設営して、食糧ともどもデポしたうえで、身軽な形で尾根に取り付く方がよいだろう。

また、ルート図からも看取されるように、冬山の大山で鳥越峠を経由する必要はなく、文殊越付近から直進してキリン峠に上がり込んだ方が近道であり、後続のスキーヤーたちの中にはそちらから上がってきているグループもいた。また、共同食でうどん・もち・ソーセージ・鍋……とかなり重い設定になっていたため、豊富な雪を利用するジフイズ食品を中心に軽量化を図ることは十分可能であった。さらに、出発自体が 8 : 00 であったが、5 : 00 出発とするのが良いように思われる。仮に以上の対策をすべて施せば、6 : 30 に文殊越分岐に到着することができ、平らなので整地作業を 1 時間

30分ほど短縮し、7:30にテン場から麒麟峠に向けて直登を開始することができた計算になる。実際には、その時間にはまだスキー場駐車場で準備をしていたのである。

(2) 事前調査 第二に、今回はジャンダルムの通過方法を思案している間に、撤退となった。事前に調査を十分にしておけば、迷わず上述の方法で通過することができたであろう。その場合、先に進んだが撤退を余儀なくされた場合のエスケープの仕方や、撤退のためのザイル残置の要否、槍ヶ峰周辺から天狗ヶ峰周辺のルート調査を十分にしておくことが肝要で、そのことが、ひいては荷物の絞り込み・軽量化につながるであろう。

(3) 雪山基本技術の修得 将来の再チャレンジのために、パーティ全体の改善点を、複数のメンバーの感想も織り込んだうえで、自省を含めて記しておく。第一に、すべてのパーティ・メンバーが現在位置の把握を意識していたわけではないように思われた。地図・GPSの確認は複数の目があつた方がよく、場合によっては無駄な時間のロスを回避することができる。

第二に、パーティ全体を通じて、キックステップやピッケルワーク（ケインポジション、ダガーポジション、トラクションポジション等）の雪山基本技術の修得がまだ完全ではなかったように思われる。これらの基本技術の欠如は、体力の欠如とともに、滑落のリスクを増加させることになる。これについては経験を積むほかないが、少なくとも技術書等で事前の検討を怠らないこと、体力面の強化を図っておくべきことは、大いに自省を含めつつ、指摘しうるのではないかと思われる。実際、数メートルの滑落が1件と、20メートル強の滑落が1件、それぞれのパーティで起きている。仮にコンティニュアスをしていなければ、いずれも100m以上の滑落となった可能性が高く、最悪の事態もありえた。コンティニュアスの場合は常に意識をしておかないと、道連れザイルにもなりうるので、先行者はパーティの進行速度を管理し、タイトな確保が十分に可能なペースを意識しなくてはならないし、そもそも全員が滑落のリスクを常に意識した行動をとる必要があるだろう。

以上の反省点を踏まえ、次の機会には天狗ヶ峰まで抜きたいものである。